

平成 25 年度特別養護老人ホーム「はなの家とむろ」事業報告

開設から 2 年 3 ヶ月が経過し、約半数の利用者が入れ替り、利用者の重度化が徐々に進行している。普通の食事を食べられる方が開設当初に比べると半分に減り、新規入所者は全員が車椅子利用になっている。終の棲家である特養にとっては、最期まで利用者の希望に沿った生活ができるように支援すること、施設での最期を望む利用者の看取りケアを充実させることが両輪の輪となっていることを実感した 1 年であった。平成 25 年度の施設目標に沿って総括および年間を通しての実績を報告する。

1. 心のこもったケアを提供しよう

- ① 24 時間シートや介護計画の作成、居室担当の配置等により、個々の利用者の意向に沿ったケアの提供ができるように努力した。
- ② 利用者・家族と良好な関係を築き、相互理解のもとケアを提供できるように、家族交流会を始めて開催した。45 名の参加があった。
- ③ 昨年に引き続きサービス満足度調査を行い、率直な意見を伺うことができた。その時々に合わせて設問を設けながら今後も継続予定である。
- ④ 敬老会等の年間行事のほか、地元のコンビニの協力による「お買い物企画」やフラワーアレンジメントの定例化、ユニットごとの誕生会やおやつ作り等、余暇活動の充実に取り組んだ。
- ⑤ 25 年度は 20 名の利用者の施設内看取りを実施した。そのご家族の意向を伺った上でグリーフケアを開始した。訪問やご家族との対話を通して、職員の良い学びの機会となっている。

2. はなの家とむろとしてのチームケアを確立しよう

- ① 利用者の状態に合わせ、医師・歯科医師・看護・介護・リハビリ・管理栄養士・生活相談員が連携し、タイムリーな関わりを実施することで、利用者の QOL の向上を目指した。
- ② 嘱託医の協力により看取りを行う中で、多職種によるカンファレンスやチームとしてのケアの振り返りを実施し、次に活かせるように取り組んだ。

3. 専門職の力を地域に活かそう

- ① 南毛利地域包括支援センターと共催で、「はなはな健康塾」と題した地域住民向け講座（平成 26 年 1 月～5 回コース）を行った。延べ 56 名の方の参加があった。次年度も内容や開催時期を検討の上継続予定である。
- ② 厚木市社会福祉協議会と共催で、地元中学生の高齢者施設一日体験授業の受け入れを行った。
- ③ 厚木市内 2 ヶ所の中学校の依頼で、職場体験学習の受け入れを実施した。
- ④ 医学部学生の早期体験学習の受け入れを行い、多角的視点を持ってチーム医療の実践ができる医師の育成に協力した。
- ⑤ 地域のふれあい祭りや盆踊りへの参加・協力、行事や会合時の施設開放等を通して、地域と顔の見える良好な関係づくりに努めた。

4. 安定した運営を目指そう

(1) 入居者のスムーズな受け入れ

- ① 25年度ベッド稼働率平均 98.5%。施設内看取り 20名。入院後死亡 2名。平均介護度 3.77。
3月末現在入居待機者 112名。
- ② 昨年度(98.4%)とほぼ同様の稼働率を維持することができたが、所得4段階が減少し所得2段階が増加傾向にある。
- ③ 今年度も人員配置等により取得できる加算(看護体制・夜勤職員配置・栄養マネジメント・精神科療養・機能訓練・日常生活支援)は全て取得できた。
- ④ 退所に伴う新規利用者の受け入れには待機者がいるにもかかわらず、利用者の状態と部屋の配置等が合わず苦慮することが多かった。

(2) ショートステイ新規利用者の獲得とリピーターを増やし、稼働率 80%を目指そう

- ① 25年度ベッド平均稼働率 70%。今期最高稼働率 88.3%。平均介護度 2.85。
- ② 目標の 80%を超えたのは1ヶ月のみであったが、昨年度(52.9%)に比べると稼働率は確実にアップすることはできた。
- ③ ユニット型の利用者負担は従来型と比べると高額であるため、経済的な問題のある方は利用のためらいや日数の制限がある場合があり、稼働率アップの障害となっている。
- ④ 「厚木市高齢者緊急一時保護事業」に伴う受け入れ利用者は1名であった。
- ⑤ 今後は緊急で行き場のない利用者の行き先が見つかるまでのミドルステイや入所待機期間の長期利用等の受け入れを行うことで目標達成を模索する。

(3) 特色を出し選ばれるデイサービスとなり、稼働率 60%を目指そう

- ① 25年度平均稼働率 38.3%、1ヶ月平均 197.3回。平均介護度 3.2。
- ② 昨年度と比べると稼働率は倍になったが、目標には程遠い状態である。
- ③ 平成 25年 9月昨年度の実績により小規模事業所となった関係から、利用者一人当たりの報酬単価がアップしたことおよび重度の利用者を多く受け入れたことで、予算には届かなかったが下半期の収支はやや改善することができた。

平成 25 年度 各部署総括

【 介護部・ショートステイ 】

1. 対外的な活動としては、
 - ①6月に開催された「ちょうじゅ ユーザー交流会」に委員会メンバー2名が参加し、電子カルテ記録システムを導入しての当施設の取組を発表した。
 - ②地域に専門職の力を活かすという点では、10～11月に行われた「中学生職場体験学習」において、林中学・睦合東中学・厚木中学から計8名の生徒を受け入れ、介護職のやりがい等を伝えた。また、4～5月に北里大学医学部2年生の早期体験学習の受入れを行った。
2. 対内的活動（運営面、ケアの向上面等）としては、
 - ・20名の方をご家族とともに看取り、24名の新規入居を迎えた。
 - ・ユニット会議やカンファレンス、施設サービス担当者会議等の話し合いの機会を大切にしながら、入居者へのよりよいケアを心掛けた。特に、毎朝の申し送りやカンファレンス開催は定着できている。
 - ・今後の課題としては、部署内における報告・連絡・相談が不十分な場面が見受けられること、話し合った事柄が十分に介護計画（入居者の生活）に生かしきれていないことが挙げられる。次年度はこの点を更に強化していきたい。
 - ・余暇活動については、上半期にそれぞれのユニットで充実化を図ったが、日々のケアに追われて定着するまでに至らなかった。しかし、定例になったセブンイレブンの出張販売や、8月に4階で行った鮎祭りの花火大会観賞の実現は、初年度を上回る取組みとすることができた。

【 看護部 】

1. 入居者一人ひとりに対しての疾患や内服薬の一覧表を作成した。結果、個々が持っている疾患についての理解がスタッフに浸透し、より入居者の観察ポイントが明確になり、異常の発見や今後起こりうる症状の予測ができるようになった。また、内服薬に関しても、心身状態や日常生活動作の状態から嘱託医との相談もしやすくなった。
2. 各ユニットの担当看護師を決め、家族とのコミュニケーションや話し合いを担当看護師が行うようにした。これは今後も継続し、より良い信頼関係を築けるよう努力していきたい。あわせて、担当看護師がユニット会議に参加する機会もあり、看取りの振り返りや意見交換を行える機会が増えた。更に看・介護間の相互理解や協力が深まるよう連携していきたい。
3. 地域に関しては、地区の防災訓練に参加させていただいた。季節に合わせた医療情報のチラシを配布した。次年度も、タイムリーな医療情報を届けていきたい。

【 生活支援課 】

○リハビリテーション科

- ・デイサービス新規利用者の訪問や担当者会議に可能な限り参加し、ご自宅の様子やご家族と直接お話することで、在宅生活のイメージがよりできるようになった。

- ・個別機能訓練計画書の管理表を作成し、作成・説明忘れ等の防止に努めた。
- ・三思会リハビリテーション科と情報交換を行い、入居者、ショートステイ及びデイサービス利用者の心身状態について等の情報を共有し、状態把握に努めた。
- ・地域講座（はなはな健康塾）や三思会との共催である転倒予防教室への参加をし、地域の方へリハビリ専門職がいることをアピールすることができた。
- ・伝達講習や外部研修に参加し、知識の向上を目指した。

現在、入居者に対する「はなはな体操倶楽部」は順調に運営できているが、「四季倶楽部」では入居者の状態が重度化しており、従来のやり方では運営が難しくなっている。そのため「四季倶楽部」の内容を見直し、入居者が楽しんで取り組めるよう次年度に向けて取り組んでいきたい。

○栄養科

1. 選択食を月3回ペースで実施することができた。できる限り、利用者本人に選択してもらえよう、聞き取りのタイミングや写真、質問の仕方を工夫する等を行っている。
2. 食の楽しみの一環として、「誕生日御膳」を提供することができた。特別な料理を提供しているわけではないが、委託業者と協力し、カードをつける等の工夫で、いつもと違った雰囲気を出せるようにしている。
3. できる限り口から食べ続けられるよう、急な食形態変更にも対応した。また、実際にユニットでの食事介助を行い、問題点と工夫により改善できる点を探っている。点滴等のほかルートがない中で、脱水や電解質以上を少しでも防げるようお茶ゼリーを“イオンサポート”に変更した。
4. 「はなはな健康塾」を協働開催することで地域に貢献できた。

○相談科

科内の基礎はほぼできたと考えるが、より内容の充実と効率化を図れるかということを検討してきた1年だった。また施設内の業務だけではなく地域包括支援センターや他職種と協働しての地域講座（はなはな健康塾）、入居家族に対しての家族交流会の開催を行えた等、発信・行動する相談科としての役割は果たせたのではないかと考えている。

- ・専門性の向上を図り、チームケアの一員としての役割を果たすべく、必要な研修に参加するとともに、内外のカンファレンス等にも積極的に参加を行った。また定期的に行っているミーティング等を通して、利用者の動向について科内で把握するよう努めた。
- ・自ら行動するソーシャルワーカーとして、できる限りタイムリーに相談にあたり、緊急相談のケースの受け入れも昨年同様積極的に行った。
- ・新しい取組として、南毛利地域包括支援センターと他職種と協働で「はなはな健康塾」を、また入居家族を対象とした「家族交流会」を企画・開催を行った。
- ・利用者・家族のニーズを把握し、施設内の課題の改善に役立てるべく、第2回目のサービス満足度調査を行った。

今後も、利用者・家族のみならず、地域住民や関係機関からも相談しやすい存在になれるよう、自ら行動する科であることを大切に業務にあたりたい。

○事務科

各自担当している業務を軌道に乗せ、毎月の流れも固定化し土台作りはできたと思う。時間内に業務を終わらせるように意識したことで、前年度比べ全体の残務時間を28時間減らすことができた。

備品台帳も、他部署の協力も得て作成し、完成することができた。

次年度は、科のミーティングを月1~2回行うことで、科内の業務を全員がカバーできるように申し送り、連携を強化していきたい。

○デイサービス

1. レクリエーションの充実について、
 - ・ 集団で行うレクにも新しいものを取り入れ必要な道具を作成した。体を動かすだけでなく頭脳を回転させる言葉遊びなども追加した。
 - ・ 集団で行うレクだけではなく、「組みひも」や「刺し子」等個々人の好みや関心も考慮して、個人でも行えるレクを取り入れた。
 - ・ 今後の課題として、男性利用者向けのレクの開発を行っていきたい。
2. 介護・看護間の連携については良好に行えた。今後の課題としては介・看護以外の他職種との連携やリハビリとの時間の調整・棲み分けを行っていくことが挙げられる。
3. 通所介護計画の作成については、各介護職員が担当利用者について立案することができるようになった。
4. 学習、知識の向上については、
 - ・ 施設内研修には積極的に参加した。
 - ・ 必要な医学的知識を身につけるために、介護職員が知りたいテーマを自分で選択し、自ら調べて学習発表会を行った。これについては今後も継続していく。
5. その他としては、利用者のニーズに把握し応えるための取組を検討している。このことで、現在の利用者の回数増加や新規利用者の獲得につなげられるものと考えている。具体的には、
 - ・ 利用中の細かな出来事についても記録に残し、カンファレンスを行うことで、利用者の声やニーズの把握を全員でできるようにしている。
 - ・ 今後としては、入浴回数の増加を希望する声があり、希望や必要な方に対して入浴サービスが提供できるよう業務についての見直しを行っている。また、ショートステイも合わせて使う利用者からの声に応じて、グループリハビリを協働で行えるシステムを作り、実践を始めている。